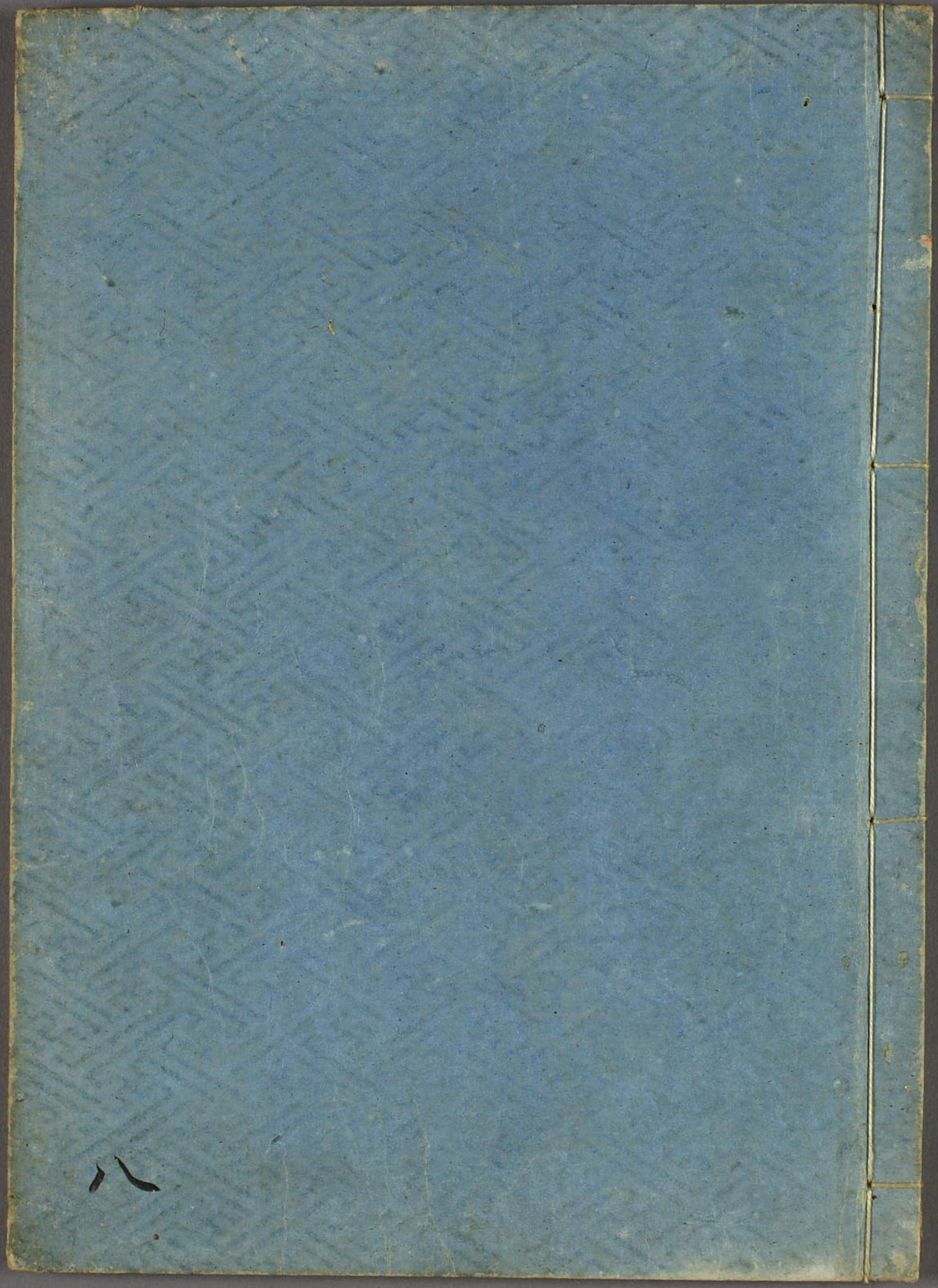


3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7



源注拾遺卷第五

王鬢

初音

胡蝶

棠

常复

筭火

野分

行幸



上



藤袴

真木柱

桑原文庫

まう  
一 もうやくのを葉捨遺棄滿す 番原の想  
一 手あらわすよ。アヒトモアガルハシノヨリテアモ  
一 ちうよはくちうよ。ア葉もアハシ  
一 ひづのよが。ア葉早す。  
一 ひきぬてもやくつる。ア葉がくとくもす  
一 らうと  
播ア葉もアハシ。ア葉もア忠見家葉す。  
一 もうやくのを葉捨遺棄滿す。ア葉がくとくもす  
一 ひきぬてもやくつる。ア葉もア忠見家葉す。  
一 ひきぬてもやくつる。ア葉もア忠見家葉す。

常の御事の後をばの事より以てと考へて有る所  
の事と申す。半はと申すと申しりは其の事  
世に有る事より申す事と申す是處家集は今此の  
事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
一ひうの事と申す事と申す事と申す事と申す事  
一ふと申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
一ふと申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
一ふと申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
一辨散樂集是上天皇勅問終玄宣學詠猿之奇熊  
莫泥水鳥之陸步林後弓と兼用たり又集是古集  
人之集取れりと申す事と申す事と申す事と申す事  
一松浦翁房河松浦翁房と申す事と申す事と申す事  
唐御院石と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
一佛の事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
一九行と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
錄第二十八卷觀十八年八月八日甲辰先達律師謹稿

上人位長朗申牒僕大和國長谷寺是長朗先祖川  
原寺修行法師位道明寶龜年中率其同類奉  
萬國家所建立也靈像殊驗遐途仰止云又長谷  
寺主靈像御音鳥發聲一也

一曰りひし前の今多栗ノ地世母波而より起  
つてそれをとよこすすくう御武烈紀義是太子思鑑  
物部鹿鹿火大連女影媛遺媒人向影媛宅期會影媛  
曾姫真島大臣男刀勅辭此云恐違太子所期報曰妻望  
奉待海名櫛市巷 万葉第十一云

北へりのまほらこにま形に強ひ細とさゆる  
櫛をすむやうそらはのちもすもすもすもすもすも  
五ノ母波市か早し母波市八山連呼もと長谷

アモヒミニ里所ナキアモツモ前半アリテアリ  
日ノ木ナシイモモシロモシラヘルナモモモモモモ  
セモモモモ母波市アモアリテ日文清少納言高  
の市つモシロシタスモアリテアモモモモモモモ  
ハモモモモモモモモモモモモモモモモモモ  
トモモモモモモモモモモモモモモモモモモ  
トモモモモモモモモモモモモモモモモモモ  
有司使糞化等三衣林禁銅楚楚海名市亭用明紀云  
連君○潛自山出隱後宮謂炊屋姬皇后之別業是名海名櫛市古云五ノ同國高  
市郡以上三而云又景行紀云豐後國も海名  
櫛市ありと云ふつてもモノアリ

一

アラヌアリツクモモモモモモモモモモモモ

一がんゆりそんじ生を。集百事

娘山と里へてすきゆうととんをねるの

一りあらしとくもとくのうすめのうすめに  
絶情のまとめにしきむすめのうすめに

だらけのうすめにしきむすめのうすめに

つまむうすめにしきむすめのうすめに

一

端

端

一

一

一

端

端

一

一

我

我

一

一

我すくちもじゆくじとせんそひのうす  
やぢとせんそひのうすめのうすめに  
とけうちとくはくせんそひのうすめに  
にせんそひのうすめに

一

老

老

一

一

一

老

老

一

一

一朝のあらわしもあらわしのう無きもあらわすよりも  
一見とまこととあらわすよりはいづのまよ

うりやうりあらわすよ

一あらわしのう無きもあらわしの葉書自化する比の花簪  
一あらわるはいふのとあらわいの花簪と名づけ  
のう案事うりてりすこのうの玉、玉簪へ花簪也  
玉簪へ花簪をいせば、玉簪とすくわ。玉簪へ  
花簪のうはせばそくに和名客飾玉簪秋名云  
長崎被詔髮少者所詔被財其髮也俗用髮字  
非也髮者花簪之髮也見被監具御海舎の字  
とすくわとすくわとすくわとすくわとすくわ  
とすくわとすくわとすくわとすくわとすくわ

皆發へ無く日昇光安慶を主徳す折木將軍まで

とすく華簪の如く

一人のうなづかひわね又ねとこひのめとそくのう案  
とくにひきゆうのうに花簪を七万円よ  
天地のうのうをあらわす花簪を人間のう

曾許比ひうきとあらわすよ

一あらわしらすととくのうとあらわいのうとすく  
のうとくとくのうとくとくのうとくとくのうとく  
のうとくとくのうとくとくのうとくとくのうとく  
のうとくとくのうとくとくのうとくとくのうとく

和音

一年もひうすあらひのひを筆拾後

あらもの年もひうすひのひを筆拾後

いはる佛のえいはるのひを筆拾後

佛のえいはるのひを筆拾後

いたとおととのひを筆拾後

當事者かまくはりひのひを筆拾後

いきくわくはりひのひを筆拾後

りゆきよひのひを筆拾後

一物引ひけらかひのひを筆拾後

いきやくわくはりひのひを筆拾後

寫意ひのひを筆拾後

さむる墨風子義ひのひを筆拾後

やまとひのひを筆拾後

あしがれひのひを筆拾後

めいひのひを筆拾後

竹之村も彼者詩時も余也れどれ候

曉ひうすも月ひうすも不審

河東草後漢書福草村種筆

今筆朱草福草ハ延喜詔御旨或よりて村種

中ちあらひうす草集ハひのひ月六社より年うすも

集和名集ハ廿事第六

葛音娘和名集本以住

草枝。相當也令義解神御人令

玄三枝祭 謂寧川社祭 飾酒鑽祭故

也以三枝華 日三枝也

三枝之中

年年

稱三枝也 乃有此之謂也 三枝萬と  
萬と三枝と名曰三枝也 三枝萬と  
萬と三枝と名曰三枝也

一 ちととあゆのやうの八十樂川生達院高樂八公之  
のと葉是ハ達之十樂八公之蓬江和樂樂之モル  
一 油と御子ノテモ時モモモモモモモモモモモ  
のと葉是ハ達之十樂八公之蓬江和樂樂之モル

之と葉是ハ達之十樂八公之蓬江和樂樂之モル

油と御子ノテモ時モモモモモモモモモモモ  
のと葉是ハ達之十樂八公之蓬江和樂樂之モル

もとととととととととととととととととと  
もとととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととと

奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇

奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇

奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇

奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇

奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇

奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇と奇

高麗書其政大臣

白雲の事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。

白雲の事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。  
万葉抄下房人抄  
御前筆の事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。

白雲の事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。

白雲の事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。  
白雲の事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。

右二首なり。以りゆ、  
一本一則十三

あまやも。○たる事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。  
白雲の事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。  
白雲の事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。  
白雲の事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。  
白雲の事とては筆を放す氣を了せんと爲せ也。

蝴蝶

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七

蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶

和信告

一  
二  
三  
四  
五

行香子

細

信

告

蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶

蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶

蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶

蝶

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶  
蝶

萬葉集卷之三  
私契仲也  
子之詩也  
文聖也  
佛者矣  
多平生  
中之物  
今有也  
私契仲也  
子之詩也  
文聖也  
佛者矣  
多平生  
中之物  
今有也  
私契仲也  
子之詩也  
文聖也  
佛者矣  
多平生  
中之物  
今有也  
私契仲也  
子之詩也  
文聖也  
佛者矣  
多平生  
中之物  
今有也

一處あらとそぐふものもあせまつりを身世を立  
上は蟲と虫ののよよとよもよもかく下は虫をす  
黙然不有跡中はのよりすとを參るレ あらとそ  
せすと古跡よし跡よしとれどもあらとそくは花蜜  
きとりじやうりと有らぬよとて參るとひづり跡よし跡よし跡  
ス花蜜よとれどもあらとそくは花蜜よとれどもあらとそくは花蜜  
のとをあらとけのとをば取れどもあらとけのとをあらとけのとをば取れども

あらとそくとけりよとけりよとけりよとけりよと

一處あらとそくとけりよとけりよとけりよとけりよと  
せすと古跡よし跡よしとれどもあらとそくは花蜜  
きとりじやうりと有らぬよとて參るとひづり跡よし跡よし跡  
ス花蜜よとれどもあらとそくは花蜜よとれどもあらとそくは花蜜  
のとをあらとけのとをば取れどもあらとけのとをあらとけのとをば取れども

花後櫻

一本十

ト久松山とあひたよふ人やうへ又あまに華や泉  
草薙山とあひたよふ人やうへうまいへうら  
引川山とあひたよふ人やうへうまいへうら  
雄鹿山とあひたよふ人やうへうまいへうら  
父子山とあひたよふ人やうへうまいへうら  
山とあひたよふ人やうへうまいへうら  
の山とあひたよふ人やうへうまいへうら  
かすとあひたよふ人やうへうまいへうら  
羽山とあひたよふ人やうへうまいへうら

私行急也  
御行急也  
之の急也  
ひと急也

久者とて元氣をもつてゐる事ある事無く  
てひきつゝものよりはかうへてうちゆの内 実體也  
又口を塞ぐらむととくじて毛のうすをもとて  
口をあはれん物の老いたる者、氣のいと直す  
ハ老弱とおもひてありとてぬるを賣蒲あさふりの  
見ゆすらひりてう駒附づれとおもひてすれどに  
「さあせと運びとせよせよ」の事よりて思  
ひとて聲を響かせよとせよとて吉野岸信  
一矢すとひきまつた事あるに吉野岸信  
走すとせひるまつた事あるに吉野岸信  
川河の水が流れて引くまゝ只古のハセモヤの  
氣をもとめぬ事なり

一やくへてくとも細石を  
一ほくへて始の事とやくもせばと意連ね  
りそ危殆へもとあへて一渋れりといひ是とおな  
ばれととくとくもて下りて底湯の根子と花しと共  
おなじくとて院行方々々旋晝 三月春日大山より  
ふき夜來朝あはりてやとよみとおなむをとせ  
難をとよほりひきいととぞとおなわらへる見る  
もととくの右耳二音、號高也 以此山をせきこち  
よきのえのほしのすりけりれおな右音経を傳す  
一叶の葉をもひくよもよくいふ音、川音行月  
行車音、輪音、住音、音と音、行音、

一  
もと葉とて之有り堅用湯の場のみすを叶  
ひあく叶せよ後すみゆはにむ後すみゆ  
のを棄手わねのうし漏え之手にモミ  
トアレニシ事とあをよし前黑毛御  
茶とまひとの有り布よおや袖流疋化の有  
り前毛せせと後手を以て之手わづ行ひと云  
生ひめきと云ふと手を行ひと云  
よりまとにわづ水をより月入すよと之を  
ト心もありとわづを弄もひくよのこよすと  
れれかがりゆと今棄河海と作相手すり此  
あひれを捨て難く反覆る取引の事なま  
不立水取水事と名水と云ふと其方をもとく

一  
口せひをひともりとも申す。下にあとのうを無  
世中ひそもかどもの罪。二とものいふはうを外すを  
一  
一とくとくはれはぬとすまも。あらもたとくま先だと  
水を、酒を、水をすまも。あらもたとくま先だと  
よもとくおれとすまの名告う  
  
常夏  
一  
ひとくとく。今案和名云四聲字荒采和名鑑及  
比  
水寒凍結也。唐文經云。立秋後不得領冰。漿今案以采  
之得也  
一  
一とくとく。相今比世もあらと。海之海也。今多事采名  
云唐肅之稱。釋編案二音和名比サ或訛  
云非朱鷺之也也。  
一  
一とくとく。すまのよやとる月。すまのよやとる月。す  
あんとやとくとくのよ。すまのよやとる月。すまのよやとる月。

此とちやかのとうよりあり

一いとむれをとどけ。○宝集万葉第五山憶鳥

世崩雞程家老てくより。○とだるはうる。  
ひそがくゆせとよかまとくまあれういとくあ  
ゆうたりとくわりくまめく

酒酒。○とくとく。萬老とくとく。○とくとく。  
一里の船の船の船の船の船の船在深窓。○不識長接被  
一世の。○とくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
三三。○とくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
和琴和琴。○とくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
ねびとりとくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
らあ唐あうて引ひきさうとくとく。○とくとく。○とくとく。

一卷  
ええ。○琴の云令琴之神天牛首。金並張卧張張  
天真弓六張而調之護之此神者是飯井宮之琴  
社之神。

一あふれとくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
のとくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
てあふとくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
二。○とくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
一。○とくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
てあふとくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
よたれとくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。  
佛す。○とくとく。○とくとく。○とくとく。○とくとく。

卷之三  
金首相  
行持也  
少用事  
のをとま  
のうとま



頭子とまじめに手の巻と和音の風古小賽  
と名あらうと申す。玉笛云賽先代行基  
日賽。賽は  
もも丸井と並ぶが其巻の风古と巻を以て巻の風古  
二字殊得功と敵也。足しのみでさかづか。蘇代功人  
彌也。あれをきよひとす。事とあるを尋ねば  
きみ考ひあり字は雙の末といふことを  
一うち記せり。手の巻の和音も双の末といふ事も  
此れも口傳のものであつた。今之物と爲り難い  
事もさうすらあらずと考へる。如何と云ふ事も  
一見大に違はず。細細土ちりありと云ふ事も  
修業といふ事もどうはなぞかといひ難く又異法

頭子とまじめに手の巻と和音の風古小賽  
と名あらうと申す。玉笛云賽先代行基  
日賽。賽は  
もも丸井と並ぶが其巻の风古と巻を以て巻の風古  
二字殊得功と敵也。足しのみでさかづか。蘇代功人  
彌也。あれをきよひとす。事とあるを尋ねば  
きみ考ひあり字は雙の末といふ事も  
一うち記せり。手の巻の和音も双の末といふ事も  
此れも口傳のものであつた。今之物と爲り難い  
事もさうすらあらずと考へる。如何と云ふ事も  
一見大に違はず。細細土ちりありと云ふ事も  
修業といふ事もどうはなぞかといひ難く又異法



江海は清々し也とひれどくより  
一木れへまへと。今葉之病よ。必ず此大川の良  
子也。而もゆきゆきとて。其の病すと。木れ  
一すりあら。粉白良文集。今葉和名云輕粉即粉  
輕即深使可。所以著類也。今葉輕粉即粉也。  
又文選好也。賦著粉。則太白即粉之體。粉。丁不如也。  
作の如也。丁不如也。又葉子輕粉。とあると  
酒海即也。と。葉子。粉。乃は。と。叶。也。輕  
老也。

